

日本医史学会編『医学史事典』刊行記念 令和5年1月例会

挨拶

小曾戸 洋

小曾戸です。皆様、オンラインではありますが、今年初の月例会にご参集いただきありがとうございます。今回は昨年、日本医史学会が総力を挙げて編集しました『医学史事典』の出版を記念して特集することとなりました。

私は副編集委員長を拝命した経緯から「ごあいさつ」のご指名を受けましたが、私は担当した項目の執筆に手がいっぱい、全体を統括すべき副編集委員長の役目はほとんど果たせませんでした。この『医学史事典』はひとえに本学会の理事長であり編集委員長である坂井建雄先生、そして執筆者の皆様のおかげであります。私からはお詫びと御礼を申し上げます。

坂井理事長はこれまで、会の運営、寄付金による財政の立て直しなど、多くの業績を果たされましたが、この『医学史事典』は坂井理事長在任中の功績として末永く後世に残るものと確信しております。

記憶をたどりますと、本書編纂の話が出て打合わせ会が開かれたのは令和元年の春のことであり

ます。坂井編集委員長から皆様へ執筆の依頼が参ったのは令和元年10月のことであります。

私は締切期限を守って11項目を提出しましたが、それから初校が出るまでに一年以上を要し、一時はほんとうに計画通りに刊行されるのかと危惧したこともありました。しかし、何とかほぼ予定通りに刊行されたのは、坂井編集委員長の尽力と忍耐の賜物にほかなりません。

「ごあいさつ」の最後に一言申し述べたいことがございます。日本医史学会の運営に長年尽力され、多くの功績を残された深瀬泰旦先生が、つい先日、今月の15日に永眠されたことであります。深瀬先生に本書のご執筆をご依頼したとき、初めは高齢の故、辞退の意向を示されましたが、ご無理をお願いしましたところ、「最後のご奉仕である」と受諾され、玉稿を賜ったとお聞きしております。お言葉通り、日本医史学会への最後の絶筆、最後のプレゼントとなりました。90歳を越えてのご尽力には頭の下がる思いであります。深瀬先生のご冥福を祈って止みません。